



事故直後からの  
汚染水海洋放出を  
4年間隠ぺい？



2011年3月11日に発生した東京電力福島第一原子力発電所の巨大事故から4年が過ぎました。しかし汚染水をめぐる状況は、収束どころか、ますます深刻さを増しています。

## 際限なく海の放射能汚染を進めている東電と国。

### ■事故直後から高レベル放射能が外洋へ流出

2015年2月には、排水路から高レベルの放射能が外洋へ直接流出していたことが発覚しました。東電は、2014年4月から測定を続け、状況を把握していましたが、公表することではなく、原子力規制委員会も放置していました。汚染源として、2号機大物搬入口の屋上のたまり水が疑われています。しかし、原子炉建屋周辺は線量が高く調査が難しい箇所も多く、特定には至っていません。排水路などから湾内外への放射能流出は、事故直後に始まり今でも続いています。一刻も早く、これを防止しなければなりません。



▲外洋への汚染水流出公表遅れに地元漁連から怒りの声 (2015年2月26日)

### ■汚染水は毎日約300トン発生、総量は60万トンを超える

東京電力は現在、1日約320トンの水を事故で溶けた核燃料の冷却のために1~3号機の原子炉に注水しています。この水は、高濃度の放射能を含んで建屋の地下に流れ込み、建屋の壁などから流れ込む1日約300トンの地下水と混合しています。東京電力は、この高濃度汚染水からセシウムと塩分だけを除去し、約320トンは再び冷却のために原子炉へ、残り約300トンをサイト内に設置したタンクに貯蔵しています。

### ■地下水バイパス、サブドレン、地下水ドレン——汲み上げた汚染水を海洋放出

増え続ける汚染水対策として東京電力は、原発の山側にある井戸(地下水バイパス12本)からくみ上げた地下水を、2014年5月から海洋放出しています。2015年2月までに52回83,740トン、トリチウムの総量は約152億ベクレルです。東京電力は、原子炉建屋周辺の井戸(サブドレン43本)と海側井戸(地下水ドレン)の地下水の放出計画への同意も地元漁業者に迫っています。これらの地下水はみな「トリチウム汚染水」ですが、東京電力は「国の基準(1リットル当り60,000ベクレル)より低い1リットル当り1,500ベクレルを運用目標とするので何も問題ない」としています。しかし、**放出総量については一切規制がありませんから、事実上規制なしに等しい状態です。**

つまり、  
取り切れない  
トリチウムは、  
全部放出ってこと？



それ、本当に  
「きれいな水」って  
言えるの？！



▲東電が「サブドレン水+地下水ドレン水」の浄化と放出計画等を地元漁連へ説明 (2014年9月18日)

### ■処理後の水も汚染水！ タンクにはトリチウム1,000兆ベクレル！

タンクの高濃度汚染水対策として東京電力は、ALPS (多核種除去設備) による処理を進めています。しかし、この装置では、1リットルあたり数百万ベクレル含まれるトリチウムの除去はできません。処理した水を、東電は「処理水」と称していますが、これも汚染水とみなすべきものです。この「処理水」を含めた汚染水の総量は60万トンを超えています。タンク中のトリチウムの総量は約1,000兆ベクレルであり、福島第一原発の事故前の放出実績の約600年分に相当します。トリチウム以外の核種を含む膨大な放射能が既に湾内外に流出したことも合わせると、これ以上、海洋への放射能放出をすべきではありません。

### ■原子力規制委員会は処理水の海洋放出を容認

原子力規制委員会は2015年1月、東京電力がALPS等で処理した「処理水」の海洋放出を行う方針を決定しました。規制機関が東京電力の汚染水対策の失敗を擁護するような方針を出すことは、規制の放棄に等しいものです。

「処理したら、  
海へ流せ」と  
指示するのが、  
規制委員会？



多核種除去設備  
ALPS

